

学 位 論 文 題 名

Bildungsideen in the Novels of George Eliot

— In Quest for Thought and Deed in Noble Agreement —

(ジョージ・エリオットの小説における教養理念

— 「思想と行動との優れた結合」を求めて—)

学位論文内容の要旨

本論文は、ヴィクトリア朝中期イギリスの作家ジョージ・エリオットの三つの長編小説、すなわち『アダム・ビード』、『ミドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』を取り上げ、その中に、ドイツの哲学・文学の影響、特に、ドイツ哲学に影響を与えたスピノザ、さらにゲーテ、フォイエルバッハからの影響をあとづけ、それを教養理念の形成としてまとめ上げたものである。

<第1章> エリオットは、宗教に疑念を抱いて以来、信仰への懷疑と教会礼拝の義務感との相克から苦悩が生じ、その後、スピノザの倫理教義に解決を見出すことによって確固たる信念を確立した。スピノザ教理の特徴は、この世の全てが神によって決定されるという決定論を採用した点にある。エリオットはスピノザ『神学・政治論』の翻訳を始め、さらにフォイエルバッハ『キリスト教の本質』を英訳刊行し、ルイスとドイツに滞在中、ゲーテの著作や資料を翻訳する一方、スピノザ『エチカ』を英訳した。それは結局出版されることはなかったが'the big book'と呼ばれ、彼女の座右の書として常に重要な役割を果たしてきた。帰国して最初に書いた評論「Wilhelm Meisterの道徳性」において、エリオットは、スピノザ崇拜者を自負するゲーテのBildungsideenを賛美した直後に、小説家に転向した。

<第2章> エリオットの最初の長編小説『アダム・ビード』には、主人公達が激情におぼれたために自己矛盾に陥り、苦悩と悲哀を経て、次第に理性に基づく真の認識に目覚め、自由と愛を獲得するという倫理的発展が描かれているが、そこには、スピノザが『エチカ』を通して一貫して主張した倫理体系が、明確にみてとれる。本章において筆者は、『アダム・ビード』と『エチカ』の倫理教義を詳細に分析し、両書を比較検討してエリオットの小説理念を明らかにしている。スピノザ教義は、決定論を採用しながらも人間の理性と自然律を一致させ、理性的認識を通して得られる意志の自由を明確に証明したところに特徴がある。『エチカ』において「神即自然」を説くスピノザは、人間精神も自然の一部であるから、感情も自然の法則の下にあるとする。また真の認識つまり自己実現に至る認識には三段階の過程、すなわち「想像と感情」→「理性的認識」→「直観知」がある。この中で、「理性的認識」と「直観知」は真の認識を得られるが、「想像と感情」は各人によって異なるために、誤謬の原因ともなる。『アダム・ビード』も、4人の主人公たち

の異なる「想像と感情」から生じた誤謬が原因となり、正しい認識を欠如したために生じる苦悩や悲哀、そしてそこからの解放がテーマとなっている。そうしたスピノザ理論は、第一段階「想像と感情」の状態にあるヘティの悲惨と破滅の中に特に明瞭に表現され、終局でアダムとダイナが最高段階「直観知」に到達したところにも反映されている。エリオットは、道徳に果たす理性的認識の重要性を説くスピノザの理念を、作家独自の思想体系に作り上げて『アダム・ビード』の中に再現させたのである。

<第3章>エリオットは小説家に転身する直前に文芸誌において、ゲーテの教養小説『ウィルヘルム・マイスター』を取り上げ、作品に流れるBildungの理念を高く評価した。本章において筆者は、『ミドルマーチ』の主人公ドロシアの自己実現への強い願望、小説に一貫して流れる「思想と行動との優れた結合」の理念と、『ウィルヘルム・マイスター』の教養理念との関連を比較・考察している。つまりドロシアは、理性的倫理的な自己形成を願って結婚したものの裏切られ、失意の悲哀や苦悩を味わう道程で次第に同胞愛に目覚め、社会に生きる個たる自己の使命をはっきり自覚した時に、自己実現を達成した。これはウィルヘルムが自己形成の修業時代を終了した段階に相当する。そしてウィルヘルムが外科医として「全体における一つの器官」として共同社会に貢献するのと同様に、自己実現を果たしたドロシアも、ウィル・ラディスローとの「愛」を媒介とした結婚によって初めて、個における内と外、精神と肉体、理性と感性との間の真に調和した人間性を完成する。さらに市民社会において優れた改革を実行するという、全体に奉仕する有為なる個となった段階が、『ミドルマーチ』序文に書かれた聖テレサの「思想と行動とを立派に結合させる」理想の到達点であり、それはとりもなおさず、人間性の完成を目指す多面的な段階的發展というゲーテのBildungの最終目標でもある。このことから、ジョージ・エリオットは『ミドルマーチ』を、ゲーテ的な意味での教養小説として執筆したと推論できる。

<第4章>小説家への転向に際して、エリオットの不安材料は劇化能力の不足であった。にもかかわらず、小説『ダニエル・デロンダ』において、美しい主人公グエンドレンと陰險な貴族グランドコートとの間の、求婚を巡る賭け引きは、まるで「劇」を見ているようだ」と好評だった。本章では、エリオットが世界の最高作品として生涯座右の書としたゲーテの戯曲『ファウスト』を、最後の小説『ダニエル・デロンダ』と詳細に比較している。グエンドレンとファウストは「能力より欲望の方が大きい」「善き人間は暗い衝動に駆られても、正道を忘れることはない」という資質を共通にもつ一方、「万有との融和」が、両作品に一貫する理念である。また作者が創造したとされるグランドコート像は、悪魔メフィストフェレスを、そしてグエンドレン像はファウストをモデルにしている。さらに、グエンドレンとグランドコートとの結婚という「賭け」を巡る会話は、ファウストとメフィストフェレスとの「賭け」を巡る駆け引きを翻案している。一方、二つの強い衝動をもつファウストと同様、グエンドレンの内奥にも「一種の潔癖さ」が元来備わっており、彼女の「心の中の善なる部分」は、善と美とを兼ね備え、より良き人生を模索するユダヤ青年ダニエル・デロンダと結びつく。小説の題名になっている主人公デロンダは刊行当初から不評であった。しかし、作者の小説執筆意図はこのデロンダ・プロットにあった。ウィルヘルム・マイスターとスピノザをモデルにして描かれたデロンダが、自己実現を模索した末に民族指導者を志すという壮大なBildungsromanを書くことがエリオットの第一の執筆意図であった。これに対してグエンドレン・プロットは『ファウスト』を翻案した「小さな社交ドラマ」として書かれたと言える。そこではヒロインが自己認識を獲得して「地上と天界の至福の美しさ」へ至り、救済と再生を遂げるといふ、小さな個人的世界におけるBildungsromanとして描かれている。これが第二の執筆意図である。エリオットのBildungの理念は、最後の小説『ダニエル・デロンダ』の両プロットにおいて、もっとも明確に読みとることができる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 長 尾 輝 彦

副 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 教 授 高 橋 英 光

学 位 論 文 題 名

Bildungsideen in the Novels of George Eliot

— In Quest for Thought and Deed in Noble Agreement —

(ジョージ・エリオットの小説における教養理念

— 「思想と行動との優れた結合」を求めて—)

本論文は、ヴィクトリア朝中期イギリスの作家ジョージ・エリオットの三つの長編小説、すなわち『アダム・ビード』、『ミドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』を取り上げ、その中に、ドイツの哲学・文学の影響のあとを、検証しようとした論文である。ジョージ・エリオットの思想形成に大きくかかわった哲学者・文学者として、スピノザとゲーテとフョイエルバッハを取り上げ、その哲学、思想、芸術技法等がエリオットに与えた影響を考察している。

ジョージ・エリオットは、小説家になる前に、スピノザ『エチカ』、フョイエルバッハ『キリスト教の本質』、シュトラウス『イエスの生涯』等を英訳し、中でもスピノザ『エチカ』を常に座右の書と称していた。また、ゲーテ『ファウスト』のグレートヘン挿話をはじめ、ゲーテ文学への傾倒は生涯変わることがなかった。ゲーテの芸術とドイツの聖書批評が、小説家ジョージ・エリオットを形成したと言っても過言ではない。

このような理解に立って、本論文は、スピノザ『エチカ』、ジョージ・エリオット『アダム・ビード』、ゲーテの小説『親和力』、ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』、ゲーテ『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』、ジョージ・エリオット『ダニエル・デロンダ』、ゲーテ『ファウスト』等々、文学・哲学の大作を次々に取り上げて、比較対照研究を展開している。

18世紀末から19世紀にかけてのドイツの哲学は、最初コールリッジによってイギリスに紹介され、イギリスロマン主義の形成理念となった。ドイツ文化から学ぶという姿勢は、その後カーライルに引き継がれ、さらにはアーノルドに引き継がれ、功利主義に対抗する19世紀の中心的な時代思潮をつくっていった。本論文のエリオット研究は、哲学や文学の大作を次々と取り上げながら、二つの文化圏にまたがる比較対照を行いながら、この英文学史の一面面をしっかりととらえており、かなりの力作と言ってよいと、審査委員会は判定した。

審査委員会の審査は、まず、哲学と文学、ドイツ文学とイギリス文学という異なる領域

にまたがる比較対照研究という、その試みのスケールの大きさを評価した。ジョージ・エリオットの作品だけに限ってみても、取り上げて詳細に論じた作品は、いずれも千ページに及ぶ長編小説である。またスピノザの『エチカ』は、それ一つでも、学位論文のテーマになってもおかしくない難解な読み物であることは言を待たない。さらにゲーテの作品は、『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』、『ファウスト』のいずれをとっても、世界文学の名著として、一筋縄ではいかない、重厚な文学作品である。これらの重要な作品を、本論文の執筆者は、十分に読みこなし、自家菜籠中のものになっていることが、何よりも評価されるべきことだと、審査委員会は考えた。

次に先行研究が少ないという点も評価した。ジョージ・エリオットとドイツ文学というテーマは、重要なテーマとして誰もが認めるところであるが、このように詳細にわたって類似関係をたどった論文は、英米においても少ない。また19世紀イギリスのこの重要な小説家を研究対象として取り上げる人がそもそも少ない日本においては、なおさらである。その意味で本論文の成果は大きいと考えた。

審査担当者は、学位申請者に対する口述試験を含め、前後6回に及ぶ審査委員会をもち、入念な審査を重ねた。口述試験に臨んだ学位申請者の受け答えは、博識に支えられ、自信に満ちた堂々としたものであった。これらの審査の末に、審査担当者は、本論文が、長年にわたる研鑽と熟慮の成果を、壮大なスケールで展開したものであり、学位授与の基準を十分満たす研究成果であるという点で、意見の一致を見て、その旨の審査報告を教授会に對して行った。